

“支援する・される”を超えて、“共につくる”へ — 地域包括支援センターが寄りそう、新しいまちのかたち —

稲城市福祉部高齢福祉課 高波 仁子

私が保健師としてキャリアをスタートした当時は「地区担当制」で、特定地域を継続的に単独で担当し、その地域の赤ちゃんから高齢者、精神疾患や感染症の患者まで、多様な人々と向き合っていました。常に中心にあったのは、「この地区に暮らす人が、生き生きと暮らし続けるために何が必要か」という問いでした。

その後、保健師の体制は母子・高齢など業務担当制へ移行し、介護保険制度が始まり、高齢者支援の拠点は在宅介護支援センターを経て、地域に地域包括支援センター（以下、「地域包括」という）が誕生しました。保健師・社会福祉士・主任ケアマネジャーの3職種がチームとなり、多様な課題を総合的に支援するこの仕組みは、本来、私がかつて地域全体を見渡しながら行っていた働きを、多職種協働で支えていく画期的なモデルでした。

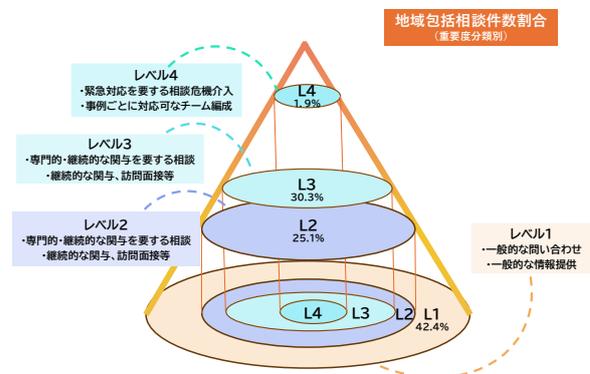
しかし、障害、児童、地域福祉業務の後、2年半前に高齢福祉行政へ戻り、研修や市内現場から見てきたのは、地域包括の「本来の力が十分に発揮されていない姿」でした。現場の働く側からは「忙しい」「業務に追われている」という声、市民からは「包括に行ったら最後」「包括に行っているところを見られたくない」という声が上がっていました。

相談の入口は狭く、結果として、相談は悪化してから届き、初動負荷が増大していることや介護とは関係ない相談にも追われ予防的支援や地域づくりが後回しになり、地

域資源は十分に活かされていない状況を感じました。

令和4年の全国的な調査*では、地域包括に寄せられる相談の重要度を1~4に分類した場合、もっとも軽微なレベル1（一般的な問い合わせ・情報提供）の件数が全体の約4割を占めることが明らかになりました。本来、専門的支援を必要とするケースに力を発揮できる地域包括職員が、軽度相談にも追われ疲弊している現状は、仕組みそのものの見直しを求めています。ここにこそ、新しい相談構造を実装する意義があります。

この軽微な一般的な情報提供で終わる相



談を外出し、一般職もしくは市民同士のつながりの中で解決することは、個人の可能性や地域の力を高めると同時に、地域包括の専門職がその専門性を発揮して業務に当たることのできる構造を作ることができるのではないかと考えました。

私は、地域包括の役割を再定義し、「担当が抱える相談窓口」から「地域で支え合う仕組みのハブ」へ転換していく改革を高齢人口の増加に伴う移転をきっかけとした地域

包括支援センターこうようだいで提案し実践しました。

第一に、“相談の入口を変える「2層構造モデル」”の導入です。第1層は、カフェや交流拠点などの「ラウンジ」で、雑談の延長で相談できる環境や市民同士のつながりの中で支援できる構造を整え、第2層は包括による専門的支援へスムーズにつなげます。市民の相談ハードルは下がり、地域包括に届く相談の精度が高まります。

第二に、アウトリーチ型の地域包括です。地域包括の周りで住民が活動できる場を整えることで、容易に市民の日常空間へ出向くことができ、関係性を築きます。

第三に、社会的処方モデルの活用です。制度による支援に加え、趣味や役割やつながりを処方することで、孤立を防ぎ、生きがいを支えます。

第四に、行政と地域包括、地域活動者の3層協働モデルへの転換です。役割を再分担し、地域全体で支える土台を整えます。

これらを地域包括支援センターこうようだいで実践することで「徒歩20分圏内に居場所と役割を見出せる」居場所が存在することが、地域住民の無限大の可能性を引き出し、「生きている」と実感する鍵であることも見えてきました。

その要素は、

①存在の承認 (Being) / 日常の延長線上に他者との接点が自然に生まれる。名前を呼ばれたり、挨拶を交わす関係。

②役割と貢献 (Doing) / 日常の延長での社会参加で、得意が自然に生き小さな役割が循環、「ありがとう」と言われる経験。

③つながりと対話 (Relating) / 徒歩圏スケールで自然な出会いや再会、気軽な声掛け。

④自己表現と創造 (Becoming) / 徒歩圏の

場所で自分の好きや思いを発信し形にできる、試行錯誤や挑戦ができる。

⑤共にある未来感 (Belonging) / 自分の住む地域の人たちと「これからを作っていく」と感じる事が「生きている」を「生きていく」に変えていく。

に分類でき、この5要素が交わるとき、人は地域の中で自分の可能性を広げながら暮らせるのです。

地域の交差点 WITH

スマホ教室+バス待ち+仕事+立ち寄り



利用人数 / 8月 446、9月 516、10月 550 (人)

地域包括の仕組みが少し変われば地域が大きく変わる。

相談の早期化、役割再分担、住民参加、多職種協働。

これらのすべてが揃ったとき、持続可能な地域包括ケアが実現します。

「地域の力が高まる＝地域包括が本来の力を発揮する」そして、「地域住民や専門職が役割を全うして働ける地域は、高齢者も誰もが安心して暮らせる地域」と、私は確信しています。

*参考文献

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社. 令和4年度厚生労働省老人保健健康増進等事業地域包括支援センターの事業評価を通じた取組改善と評価指標のあり方に関する調査研究. 2023. P35-38